

に在り、我今日以後一切の欲惡煩惱を打ち捨て、社會國家の爲に盡し、眞實の佛弟子となり、法輪を轉じ法の鼓を打ち、群生に導いて妙法蓮華の船に乗じ、速に斷迷開悟離苦得樂、寂光の都に到らしめ、此の功德を以つて今はなき慈父の靈位に向向せん、これ眞實の大孝、眞實の報恩謝徳なり。

## 思ふまゝに

武波正芳

中學を出て、佛教も法華經も一寸も知らなかつた人間が、身延で三年間、ともかく此の事について研究をして見て、果してぞういふ收穫があつたのだらうか。今日の時勢に於いて、自分の職業として佛教を選ぶと云ふ事は、一つの冒險でもある。佛教は今日の文化の主流を爲してはゐない。にも拘らず、此れに頼つて一生を暮さうと云ふには、何かの價値を認めた上での事でなくてはならない。此の意味に於て、卒業をひかえた今、反省して見る事もつまらない事ではない。然し、私は突然に、「法華經の眞理如何」等といふ問を出されても、満足に良心的な答へをする事が出来ない。もし私に、何か此處に書く事が出来るかすれば、漠然とした感じを述べるに止まつてしまふであらう。

願はくば我祖上人哀愍救護を垂れ、某出家沙門の願行を成就せしめ給へ。

卒論の稿を祖廟の御前に捧げ恩師に謝し、亡父の靈前に供へて所感を述ぶ。(高?)

(完)

私達が今學んでゐる事は、皆經典を本にしてゐる。そして今迄手に取つた事さへなかつた經典を、ともかく觸れて見る事だけでもしたのである。經典はそれ自身哲學を説いたものとしても、餘りにも文學的である。釋尊の説法を書いたとしても、數人の文章家によつて美しく飾られてゐる。文學作品として此等のものを見た時、どんな位置にあるものかと云ふ事は一寸云へない。文學は文學にしても、餘りにも眞を理解するには困難な文學である。

經典は多く、釋尊と弟子との問答である。私達が此の經典を研究する時には、果して自分が弟子の立場に立つて釋尊よりの答を受けて哲理を理解して行くのか、或は釋尊と弟子とを此方から客觀的に見て、双方の間に取交される言葉を綜合して研究

するの、どちらの立場によるのだろうか。私達は今勿論後者の立場によつてゐる。哲理の研究としては此の態度は正しい。此の研究態度を取る時、その目的は釋尊の得られた究竟の眞理を我々が握むと云ふ事である。其處で、一つ位釋尊の出家より成道迄の六年程の間の事を思想的に述べた經典があれば、わづらはしい儀式等がなく、直ちに眞理が分り、大いに助かる譯である。然し後四十餘年の説法が澤山書かれてゐるに比べて、成道前の思想的發展を述べたものは一つもない。僅かに此の間の挿話を一、二述べたに止まつてゐる。然し、此れは何も經典作家達の罪ではない。經典作家達は、一方で正しく哲理を理解すると共に、それを宗教的に書き上げなければならなかつたのだ。其故經典を作る時には、釋尊を何處迄も崇めて、我々の直接知る事の出来ないもの、僅に説法によつて少しづつ、理解して行けるものとしなければならなかつた。後世の坊さん達は四十幾年かの説法を見て、自分の思想を高めて行く事に努力を傾注した。そして、幾多の大師の後、天台大師が始めて此れを完成した。實に天台は一生をかけて、成道迄の六年間の事を經典作家達に代つて、如實に畫いたものと云へる。

私達は要品として八の巻を讀誦する。八の巻には、法華經守護の善神とか、菩薩の過去に法華經を修行した有様等が説かれてゐる。然し此れを見ても一寸も切實な感じは起らない。法華經守護の天神は多いと云ふ事だから、法要に八の巻を讀むのは此等の神々の爲だらうが、續つて自分と云ふものを本位に考へ

思ふまゝに

て見ると、何だか飽き足らない心持がする。私は美しい文章で書かれた法華經の中でも、一番好きな處は何處かと聞かれれば分別、隨喜、法師の三功德品だと答へたい。此の三品は壽量品のすぐ後に列なつてゐる。分別功德品は法華經壽量品を眞に理解した者の受ける功德を、隨喜功德品は一句、半偈でも法華經を聞いて隨喜の心を起したものと受ける功德を、法師功德品は法華經を説く等の修行をする者の功德は各々明してある。我々は美しい物質を所有すると云ふ事は實に楽しい。

古代印度の爛熟した文化の花と、當時の印度の人々の憧れを此の三品に見ると共に、我々の其れと變らない憧れをも見る心地がする。他の品々に於ては、すべて、一面容易しさうに見えても實はそれが難解であつたりするのに、此處だけは實に氣樂に讀んで行く事が出来る。八の巻其他で失望した人は此の三品を見て、案外な氣がすると共に、法華經にも實に理窟なしに美しく楽しい處があるのだな、と喜ばしくなるだらう。確かに、現代人には一番身近く感ぜられる處のものである。

此の三品が法華經二十八品の中でも、一番忘れられてゐるものであらう。序品から安樂行品に至る迹門の巧みな移行は知悉されてゐる。涌出、壽量の後で不輕品と、神力品と、八の巻を數へた時、分別功德品等は全く有つて無いと同じやうなものである。思想性が薄いといふ處から敬遠されてしまつたのであらうが、宗教的感情の一つとして大切なものではなからうかと思ふ。(高3)

二三七

一四、一〇、五一